民話紹介

鶴見郷「蓮台寺」秘話

―『鶴見村の民話と伝説（第七話）』―

鶴見町（旧町名―原）（故）安部作男

もと、豊国の朝見郷「鶴見の里」は、西に雄大な鶴見岳を主に内山・ガラン岳の連山を仰ぎ、東に波静かな豊後湾を見下ろす丘陵地にあり、風光明媚で自然環境に恵まれた土地であった。

―時代は降って、徳川享保年間（一七一六～三六）の出来事である。たび重なる季節はずれの風水害や大豪雨が続き、田畑を洗い流し、三年の間は作物は実らなかった。鶴見村に住む人々は飢饉の苦しみにあえいでいたのであった。

従来ならば、久留島藩の「隠し米倉」的な存在であった鶴見の百姓は、全く困り切っていた。採れない米の代用として、山に行き木の実や草の根を採って食べ、命をつないでいたのである。僅かではあったが藩公より直江原中庄屋を通じて米・麦・豆の援助を受けていたが援助物資にも限りがあった。これ以上の飢饉が続いてゆけば、農作用に飼っている牛や馬を食べなければならないまでになっていた。しかし、四ツ足の動物を食べることなど、仏教心の強い鶴見村の百姓達にとっては、仏道上の「餓鬼道」（三悪道の一つ、他は地獄道・畜生道）に落ちることを知っていた。

連日のように一人、二人と餓死者を出し、悲しみの重なる飢饉の村に、ある日一人の旅層が洪水跡の荒れ果てた道の無い瓦礫の合間から現れて、村の中央部、竹の内集落を訪ねてきたのである。

一本の青竹を杖にして、身に着けている物といえばボロボロに裂けて、荒縄を腰紐の代わりに巻きつけ、やっと衣を身体に着けているという気の毒な姿であった。だが、その風貌のどこかに何か言い知れぬ高貴さが漂っているように見えた。

竹の内集落の西の山際に立っている村役の家を訪ねて来た僧は、鶴見村に来た理由をこう語った。―

「私は、豊前一帯に仏法を布教するために幾年もかけて回り、昨年からは豊後の国東にある六郷満山で最終的な呪力獲得の修験道を続けていたが、鶴見村の人々があまりにもひどく地獄の苦しみにあると泉福寺（国東町大字横手所在、豊後曹洞禅の名刹。開祖は永和元年＝一三七五無著妙融禅師）の僧から聞いて、なんとか里人の力に成りたいと思い来村したのです」

このままの状態があと三ヶ月も続くならば、鶴見村の全域で餓死して廃村になることは火を見るより明らかであった。僧は、現在まで仏道修業で身につけたすべての秘法を、旅の

終わりのこの村で役立てたいと決意して来たのであった。

村役は、飢饉の時だけに藁をもつかむ思いで旅僧に対して感謝した。

僧は村人達を集めて、この地域だけが特別に被害を受けたのは何か因果があるはずだ、と言った。佛法上にいう「五逆罪」（君・父・母・祖父・祖母を殺す罪）か「謗法」（仏法をそしる罪）があったはずだと言って、このことを村人に尋ねた。また、この村には寺の跡がないか、とも聞いたのである。

村人達は、竹の内村から大畑村に抜ける山道の台地に、昔「大平山蓮台寺」という寺があったと言って、その跡地に僧を案内した。草深い荒れ果てた寺跡に立った僧は「これがあの有名な幻の寺、大平山蓮台寺跡か。なんと、もったいなくも申訳けないことを……」。僧は幻の寺発見の感激と、あまりにも荒れ果てている寺跡を見て、悲しみか喜びか村人達には分からなかったが、大粒の涙を流して嘆いていた。

大平山蓮台寺は、天暦元年（九四七）の昔、建立した古寺であったという。建立の因縁は、貞観九年（八六七）正月二十日、鶴見岳の大噴火により、鳴動は三日間も続き、降灰や降石が鶴見村一帯に積もり、比叡山延暦寺の領地であった鶴見領は大被害を受けたのである。時の朝廷（清和天皇）の命により、火男・火売二神の怒りを和らげるために、神前で大般若経を読ませ「火伏せ」の供養を行うと同時に、常時、鶴見岳を崇敬し鶴見岳の神霊に「五穀豊穣祈願」をさせるために、天台宗比叡山延暦寺より高僧を送ってよこした。

大噴火があってから、八十年後に造った寺だとも僧は村人達に説明したのである。

その蓮台寺も後年領主が変ってゆき、天正四年（一五七八）には、国主である大友義鎮（のちの宗麟）がキリスト教に改宗するや、「天の神は唯一神のみ」といって由布院のキリスト教信者で豪族の奴留湯氏を使って、由緒ある蓮台寺を焼き払ってしまった。わずかに焼け残った寺も、慶長五年（一六〇〇）九月には再び大友と黒田の軍勢が戦った石垣原の合戦で戦火に焼かれて以来、完全に廃墟と化してしまった。以後、雑木が生い茂り、人々は寺の存在さえ忘れて「幻の寺」となっていた。

鶴見村に蓮台寺が建立された以降は、神佛のありがたいご加護を受け、豊かな生活を続けて来た。だが、石垣原合戦以後には完全な廃寺となり、村人達はその大恩ある寺を戦火から守れず、百二十年も経過しているにもかかわらず再建しようともせず、特にひどかったのは、寺を必死に守ろうとしていた修験僧何人かが、焼跡から遺体となって発見されたのであった。村人達は、黒田軍の報復を恐れたのか寺僧の供養をせず、その遺体も放置したままであったという。

諸天善神は大いに怒り、無慈悲な村人達に反省を求めるた

め、罪の現成として以後鶴見村はいつも特別に天災を受けて作物も採れず、飢饉の苦しみを味おうのだと旅僧は村人達に語ったのであった。

「寺を焼け！」と命令した大友氏も、豊後在国四百年の長い歴史があったが罪の現成で二二代で亡びてしまい、火を放った奴留湯氏も由布郷から一族は姿を消してしまった。「これみな佛罰なり」と僧は付け加えた。

村人達は、僧の話を蓮台寺跡で聞くと、深いざん悔と蓮台寺に対する畏敬の念をいっそう深めたのであった。また、「因果応報」の厳しさも悟ったのである。

だが当時の村人達は、鶴見村が受けていた当時の状態では寺を再建する財力も無く、そのために動く人間の体力も持ち合わせなかった。どうしたら、この地獄の苦しい生活から抜け出すことが出来るかと頭を抱え込む村人達であった。

「坊様、我々村人は、現況を見てもおわかりのように、寺の建立は早急には出来ません。が、先祖が不敬・不浄をした罪滅ぼしや、亡くなった修業中の坊様を供養することは出来ると思います。なんとか、われ等に供養の方法を教えて下さい」

里人は必死になって旅僧に頼んだ。だが、寺跡の長石に腰を下ろして、じっと目を閉じてしばらく考えていた。やがて立ち上り、村人達に向かって説教した。

「よかろう。諸天善神と鶴見村の鎮守神に対し、信義潔白を通すためにも身を天上界に差し出すことにより、自ら佛界五戒（不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒）をおこなうこと以外にこの村を救うことは出来まい」

「和尚様、それはどういうことですか。我々百姓には、理由がさっぱりわかりませんが……」

「佛法の利益に二道あり。一つを冥益といい、今一つを現（顕）益という。拙僧は、急いでこの村を救わなければならぬ。ならば顕益を求めて、早期に利益を現すためにこの蓮台寺跡にて即身成佛となろう。世にいう、人柱と思えば良いのじゃ。もうそれ以外に、この村を救うことが出来ぬ所まできているのだ」

静かに顔色一つ変えず村人達に語る僧を見て、百姓達はびっくりしてしまった。村人は、人の話に聞いたことのある「即身佛」を蓮台寺跡で現実に行なおうとしている僧に対して、唯、おろおろするばかり。いかに苦しい生活を続けていても、僧の命と引き換えに浄土の招現は、あまりにも無謀なことと思ったのである。

「お坊様、その即身佛に成ることだけは止めてください。お願い致します」

村人達は、今度は必死になって止めた。だが僧の決意は大変に固く、誰も止めることは出来なかった。

こうして、僧は蓮台寺跡に小さな小屋をつくり、即身佛になるための荒業を始めた。

御門川（春木川の上流）の清水で心身を祓い（万度祓）、毎日、小屋の中で般若心経を一万遍唱えていた。そんな荒業が七日間行なわれた。村人達は小屋を遠まきにして見守った。八日後の朝、小屋から出て来た僧は村人達に向かい、寺跡の南側に一段と高くなっている土盛りを指さして横穴を掘るように命じた。

奥行き一間（六尺、一・八メートル）、高さ五尺、巾も五尺。一人がゆっくり座れる広さであり、上部の天井に青竹の筒をさし込み空気穴を作った。土盛りの中には地面に藁むしろ一枚を敷いて、経机をまん中に一台置き、経典数冊を積み重ねて五寸のローソク二本を経机の端に立て、静かに僧は座った。こうして入口を大きな岩戸で閉じさせた。

村人は、僧が完全に地中にこもり外部と断絶されてしまうと、呆然とその場に立ちすくんでいた。僧が「即身佛」（天台宗・真言宗・日蓮宗などで説かれ、特に江戸時代、衆生救済のため自ら断食死してミイラ化した行者がいた）に成り、里人を救う崇高な姿と深い慈悲心に感謝を捧げると共に、涙を流しながら洞穴に向かって両掌を合わせるのであった。

「申しわけありません。必ず御僧の供養は永遠に、孫子の代といわず末代まで致します」と誓ったのである。旅僧が「即身成佛」になると聞いた鶴見村の人々は、蓮台寺跡に続々と集まって来た。

そして、その土盛りの前に座り込み、一心不乱に般若心経と法華経の観世音普門品（観音経）を唱えた。村人達が合唱するお経の声は、周囲の深い山々にこだまして一大音響となり、鶴見村中に響き渡った。と同時に、地の底から相和するように、地底から僧の唱えるお経が低い声ながら聞こえてきた……。

村人達も僧が即身佛に成るため、地底に入ってから七日間、蓮台寺跡に通ってお経を唱えた。僧の唱えるお経の声は昼夜の別なく聞こえて来た。特に竹の内村から少し離れた大畑村までも夜の闇を透して聞こえた、という。だがその声も、一カ月もすると聞こえなくなった。僧は完全に即身佛となり、鶴見村を身を挺して護ってくれたのであった……。

それ以後は、鶴見の里も昔と同じように平和な時代が甦り、諸天善神の加護のもと自然界と五穀豊穣の恵みを存分に受け、再び黄金の波打つ稲田が明治の世まで続き、風雨や洪水の害も他の地域よりも軽く、「鶴見千石」の名をほしいままにしたのである。

また、竹の内村の農民は即身成佛になった旅僧に対して、報恩感謝をするために二基の五輪塔を建立して蓮台寺跡の土盛りに長く供養を続けた、という。

昭和の始め頃まで、原中村の村人達は小倉の照湯まで殿様湯（御前湯とも）と呼ぶ共同温泉で入浴していた。雨の降る夜など蓮台寺前の近道を通ると、細い山道に「爾時、無尽意菩薩、即従座起」と地の底から、旅僧の唱える法華経が夜間に聞えて来たと古老は語る……。

旅僧が即身佛になってから二五〇年と歳月は矢のように流れ去っていった。現代では宅地化が進み、市営住宅が蓮台寺跡の一部に建っている。そのうちに、蓮台寺跡も完全に住宅地となるであろう。

（おわり）

（参考ー編集部）

享保の飢饉ー享保一七年（一七三二）イナゴによる虫害で近畿以西をおそった。餓死者は十万人以上、飢えた者は二六〇万人以上と推定されたが、江戸幕府は被害の少ない地方から救援米・米銭義捐・貸与等の救助策を講じたが、応じきれず、江戸（当時百万都市といわれ、八百八町）でも米価が高騰し、翌正月に「打ちこわし」騒動の一因となった。

（京大国史研究室編『日本史辞典』）

執筆者　安部作男氏

昭和十一年、鶴見の原（現鶴見町）出身。自営業のかたわら郷土史の研究にうちこむ。朝日小学校の開校記念誌でも活躍、本誌第二・三号にも投稿して頂いた。なお、昭和五十四年には自費で『鶴見村の民話と伝説』を出版された。平成十二年十一月二十日没。ご冥福をお祈りします。（編集部）

現状の風景
（平成15年10月写）

（写真提供）大平敦生氏
竹の内町３－２組